

2001年10月18日

## ディケンズ・フェロウシップ日本支部 ニュースレター

2001年度総会は10月6日、玉井史絵氏のお世話で同志社大学において開催された。会場は相国寺の森と麓を見わたす会議室で、ここに*The Microcosm of London* (3 vols.), *Criminal Prisons of London*をはじめ、珍しい書物を展示していただいた。総会はシンポジウムおよび講演と盛りだくさんで、質量ともに日本支部の充実を示す、すばらしい企画であった。以下、総会の報告と今後の予定についてお知らせいたします。

### 総 会

西條支部長の司会によって議事がすすめられた。

#### 1 総会議事

##### (1) 役員および任期

「日本支部規約」に従い、役員交代は来年度の総会までありません。

[報告了承]

##### (2) 2001年度活動報告

春季大会開催(6月9日、於成城大学)、『年報』発行(10月6日)、総会開催(10月6日、於同志社大学)、『年報』24号は原・佐々木・植木・西條の理事の審査により、投稿論文編中、5編を採択、また昨年度春季大会のSchlicke氏の講演と総会におけるシンポジウムを特別企画として掲載しました。今後とも同様の方針で誌面の充実を図る予定です。なお、編集長および理事の献身的努力により、投稿締切後、審査、再提出、編集・校正をへて『年報』の完成までを月弱ですませる体制が出来上がりました。日本支部の誇るべき離れ業です。なお、次の『年報』では表紙にも工夫を施すつもりです。ご期待ください。

[報告了承]

##### (3) 2001年度会計報告・監査および2002年度会費

財務理事より別紙の通り会計報告および監査報告があり、了承・可決された。

[可決]

2002年度会費は、本年度と同じ6,000円に据え置く。

[報告了承]

##### (4) 諸報告

a 春季大会は2002年6月8日に駒沢大学で開催します。研究発表を希望される方は年内に青木理事まで申し出て下さい。

b 松岡理事より、会員の業績の電子化およびウェブ掲載への依頼がありました。支部のウェブサイト充実のためにも、支部長として会員の皆様にご協力を強くお願いいたします。

c ロンドン本部より依頼のあったDora Annie / Catherine Dickensの墓石修復寄付を会場で行いましたところ、皆さんから17,035の浄財をご寄付いただきました。支部より4,565を加え、計21,600を日本支部の寄付として本部に送りました(10月15日)有難うございました。

#### 2 シンポジウム 「ディケンズ批評 古典時代」

西條支部長の司会により、死後約100年にわたって無視され否定されつづけたディケンズを弁護した名の評論家の再評価に臨んだ。小池氏は1898年の時点で、きわめて先駆的な批評を行ったGissingを取り上げ、今日私たちが論じているディケンズの側面、たとえばGarth芸術との類似、W. Dorritの秀逸さなど、すべてGissingがすでに述べているとの貴重な指摘があった。次いで佐々木氏は、K. Chestertonの書いたディケンズ論をすべて洗い出して読み、チェスタトンの論点を明快に要約した。GKCはpessimist Gissingに標的をあわせ彼のディケンズ論を批判していること、またWilsonと比較するとGKCがディケンズの本質をより深くとらえている事実を明確に伝えた。最後に松村氏はGeorge Orwellが何故ディケンズを好いたか、それは彼の社会的良心と政治的関心ゆえで、究極的にはディケンズが既存の制度改革ではなく、人間精神の改革を求めた点にあったことを指摘した。ついでモラリストの視点と創造性の豊かさに言及したあとSwinburneの“he was not for an age, but for all time.”を引いて結語とされた。ディケンズ否定の時期における強力な弁護が、名の卓抜した講師により聴衆

に鮮明に印象された、意義深いシンポジウムであった。

### 3 講演

廣野氏司会によるロウ氏の講演は、ヴィクトリア朝における小説出版に関するもので“Slimming or Slumming?—Dickens and the Shift from Monthly to Weekly Serialization”と題してディケンズに始まった月刊分冊出版形式が世紀中ごろから週刊連載に変わり、対象も下層大衆読者にねらいをつけたため、質的にも量的にも小説が低下してゆく推移を語った。紙税、印紙税が完全に撤廃された頃からセンセーション小説が流行し、とりわけ地方の新聞・雑誌が勢いを増して、小説出版が新聞連載へと急激に傾斜してゆく様子を資料とともに解説した。質問も相次ぎ、ディケンズの文筆活動を広い目でとらえる機会を提供された。

### 4 懇親会

懇親会（於京都ホテル）には3名が参加し、高見幸郎氏の乾杯音頭の下に、会員相互の楽しい語らいと交歓がおこなわれた。

## お知らせ

- 1 2002年度(2001年10月~2002年9月)の年会費6,000円を12月末日までに同封の振込用紙でお支払い下さい。2001年度年会費未払いの方には*Dickensian*をお送りしていません。ご確認ください。
- 2 『年報』25号への投稿論文を募ります。投稿規程は『年報』の記載通りです。
- 3 日本支部のホームページでは会員の皆様が書かれた論文（特に紀要論文や若い方の論文）をできるだけ多く掲載したいと考えています。現在、日本支部のホームページに格納されている論文数は本です。ワードだけでなく、どんなワープロソフトでも構いませんので、ご協力いただける方は論文のファイルを電子メールに添付して、もしくはフロッピーに保存して松岡理事 [mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp](mailto:mitsu@lang.nagoya-u.ac.jp) まで送っていただければ幸いです。また、最近書かれたディケンズ関連の論文についても、書誌を作成する資料とさせていただきますので、電子メールで逐次お知らせください。電子メールでの表記の仕方は <http://wwwsoc.nii.ac.jp/dickens/biblio/biblio.html> を御覧ください。
- 4 Dickens Fellowship Conference の今後の予定。
  - 2002年 London, July 18-25 (University College, London)
  - 2003年 Bristol & Clifton, July 24-29 (Clifton Hill House)
  - 2004年 Melbourne, at the end of July (Univ. of Melbourne)

以上